

## 子どもの自尊感情，自己制御，情動表現スタイルの形成

—母親の養育態度と言葉かけの影響に関するパス解析—

森 下 正 康

(発達教育学研究科)

### 要 約

本論文は，母親の養育態度と言葉かけが子どものパーソナリティ形成にどのような影響を与えるかについて，最近の著者たちの研究をまとめたものである。次の4つのテーマからなる。

1. 言葉かけと親子関係：中学・高校時代における母親からの言葉かけについて，新しい4尺度を作成した。共分散構造分析の結果，中学・高校時代の『受容的な言葉かけ（寄り添い・受容支持）』は，女子大学生の母親への「信頼尊敬」を高め「親への反発」を低下させていた。他方，『拒否的な言葉かけ（拒否否定・突き放し）』は，「親への反発」を高め「信頼尊敬」を低下させていた。

2. 自尊感情と他者受容の形成：(1) 小学校5，6年生を対象とした研究において，楽しい『食卓の雰囲気』が子どもの『自尊感情』や『他者受容』を高めていた。食事場面を楽しみと感じる背景には，母親の食べ物に対する「感謝」の言葉かけや，「共感」の言葉かけが豊かであることや，「拒否」の言葉かけが少ないという特徴のあることがわかった。(2) 児童期に子どもの特徴（特性）に関する母親からの「ポジティブ」な言葉かけは，女子大学生の「自尊感情」や「他者信頼」を高め，「ネガティブ」な言葉かけはそれらを低下させていた。具体的な場面における母親の「感謝」の言葉かけが多いなかで「否定的」な言葉かけが多い場合，「他者信頼」を高めることが示唆された。

3. 自己制御の形成：(1) 児童期に母親から「自己抑制を促進する」言葉かけが多いほど，女子大学生の「自己主張」が高かった。また「自己主張を促進する」言葉かけは直接「自己抑制」を高めるとともに，母親との「信頼」を高め，それを介して「自己抑制」と「頑張る力」を高めていた。特に，母親への「信頼」が子どもの「自己抑制」と「頑張る力」を高めることが注目された。(2) 児童期の母親の「受容的」な養育態度と「励まし」の言葉かけが，女子大学生の「根気我慢」を高めていた。「自己主張」に対する「自己表現の誘導」の言葉かけの効果は，母親の「受容的」態度や「励まし」の言葉かけがあってこそみられ，それがない場合には逆効果をもたらすということが示唆された。

4. 情動表現スタイルの形成：(1) 仮説とは反対に，娘（女子大学生）の「親和的情動表現」が母親の「親和的情動表現」を高め，娘の「否定的情動表現」が母親の「否定的情動表現」を高めていた。また，娘の「親和的情動表現」が，娘と母親の『信頼関係』を高め，母親の「否定的情動表現」がその『信頼関係』を低下させていた。(2) 児童期の母親からの「肯定的」な言葉かけが，直接，女子大学生の「肯定的情動表現」スタイルを高めるとともに，「信頼関係」を介して「肯定的感情」を高め，それがさらに「肯定的情動表現」スタイルを高めていた。児童期の「否定的」な言葉かけは，「信頼関係」を介さずに，女子大学生の「否定的感情」を高め，それが「否定的情動表現」スタイルを高めていた。そして，母親の言葉かけの背景に養育態度があるということが確認された。

キーワード：自尊感情，自己制御，情動表現スタイル，母親，養育態度，言葉かけ，パス解析

## はじめに

親の言葉かけが子どものパーソナリティ形成にどのような影響を与えるか、これが一連の研究のテーマである。親からの子どもへの言葉かけは、子どもの行動に対する指示や評価や感情の表現である。それは日常の場面で発せられるものであり、比較的観察されやすい。それにもかかわらず、言葉かけに関する研究は少ない。

本論文は、著者が京都女子大学での9年間の在職中に、学生と共に起こった研究のまとめである。主として母親からの言葉かけに関する研究に焦点を当てた。ここで扱った研究は、すべて京都女子大学発達教育学部紀要と大学院発達教育学研究科紀要「発達教育学研究」に掲載されている。研究は主として女子大学生を対象とした質問紙法である。本論文は以下のような4つのテーマからなり、いずれも著者がパーソナリティの重要な側面と考えて、注目してきた研究テーマである。各テーマに関する従来の研究の引用は、紙面の関係から最小限にとどめた。また、言葉かけなどに関する項目は、各論文を参照していただきたい。

### I 母親の言葉かけと親子関係

日ごろ、親からどのような言葉かけがなされているだろうか。これまで、このような言葉かけについての研究は少なく、尺度もほとんどみられない。そこで、親からの言葉かけに関する新しい尺度を作成することにした。

#### (1) 母親からの言葉かけ尺度の作成

中学・高校時代の母親の言葉かけに注目し、13名の発達心理学領域の専攻生に対して予備調査をおこなった。日常の20場面を想定し、その場面において母親からどのような言葉かけがなされるか、具体例を収集した。場面ごとに言葉かけ(項目)を集め、次の3点から整理した。  
①肯定的言葉かけ：子どもに対する受容的で肯定的な態度を示す言葉かけ。  
②否定的言葉かけ：子どもに対して叱責や批判、拒否的な態度を示す言葉かけ。  
③中性的な言葉かけ：肯定的とも否定的ともいえない言葉かけ。予備調査に

基づいて、各場面において肯定的・中性的・否定的な言葉かけを用意し、20場面60項目から成る質問紙を作成した(森下・松山, 2014)。

次に、女子大学生194名を対象に、中学・高校時代を思い出してもらって、各項目について母親からどの程度そのような言葉かけを受けたか頻度を評定してもらった。また、現時点での母親に対する態度について評定してもらった。

得られたデータについて因子分析をおこなった。まず主成分分析をおこない、固有値の変動(スクリープロット)と説明された分散の値を参考にして因子数を決定した。次に最尤法による因子分析をおこない、最終的にプロマックス回転をおこなった(足立, 2006)。各因子に高く負荷する項目の評定得点の和を尺度得点とし、各尺度の $\alpha$ 係数を算出した。以後の因子分析についてもこの手順に従った。

#### (2) 母親の言葉かけの因子

母親からの言葉かけについては次のような5因子を得た。第1因子は「何があったの?」「今回は残念だったね」などの項目に負荷が高く、子どもに対して共感的で子どもの気持ちに寄り添う「寄り添い」の因子。第2因子は「やっぱりだめね」「また同じことしてばかね」などの項目に負荷が高く、子どもに対して批判的、拒否的、否定的な「否定拒否」の因子。第3因子は「あとで困るのは自分よ」「いつかやらないといけないんだからちゃんと進めなさいよ」などの項目に負荷が高く、子どもに対して冷たく「突き放し」の因子。第4因子は「次がんばったらいいよ」「そういうときもあるわよ」などの項目に負荷が高く、「なぐさめ」の因子。第5因子は「よかったね!応援してるよ」などの項目に負荷が高く、暖かい「受容支持」の因子と命名した。

各因子に高く負荷する項目から尺度を作成し、 $\alpha$ 係数を算出した。そして、ある程度信頼性の高い新しい言葉かけ尺度を作成した。尺度間の相関は、「寄り添い」と「受容支持」との言葉かけ相互にプラスの相関があり、共分散構造分析に際して『受容的な言葉かけ』という潜在変数を導入した。また、「否定拒否」と「突き放し」

の言葉かけの間にもプラスの相関がみられ、『拒否的な言葉かけ』という潜在変数を導入した。図1に示すように、潜在変数としての『受容的な言葉かけ』と『拒否的な言葉かけ』とは一つの次元の反対方向ではなくて、その間には正の相関がみられた。どちらの言葉かけも多い母親や少ない母親がいることが分かった。「なぐさめ」因子は、『受容的な言葉かけ』と正の相関が、『拒否的な言葉かけ』とは負の相関がみられた。

### (3) 母親の言葉かけと子どもの態度

母親に対する子どもの態度について、因子分析の結果、4因子が得られた。第1因子は親への反発や不満を示す「親への反発」の因子、第2因子は親への「信頼尊敬」の因子、第3因子は「親への依存」の因子と命名した。第4因子は $\alpha$ 係数が低かったため、以後の分析では使用しなかった。

仮説に沿って共分散構造分析（小塩，2008；豊田，2007）をおこなった結果、図1に示すように適合性の高いモデルが得られた。パス係数は、すべて5%レベルで有意であった。図のよ

うな説明変数のセットの下で、中学・高校時代における母親からの『受容的な言葉かけ』は、母親への「信頼尊敬」を高め「親への反発」を低下させていた。他方、『拒否的な言葉かけ』は、「親への反発」を高め「信頼尊敬」を低下させていた。このような言葉かけの、母親に対する「信頼尊敬」の説明率は50%と比較的高いものであった。

子どもは、自分のことをよく理解し寄り添って支えてくれ、自分を愛し応援してくれる、そのような受容的な言葉かけをしてくれる母親に対して信頼や尊敬そして愛情を育むことが示唆される。その反対に、非難や否定、冷たい突き放しの拒否的な言葉かけをする母親に対して、子どもは反発を高めるだけでなく、母親への信頼尊敬を形成できないということが示唆される。

このような影響は、言葉かけそのものの影響というよりは、言葉かけに示された親の態度の影響ではないかと推測される。この点は、この論文（森下・前田，2014）で検討する。

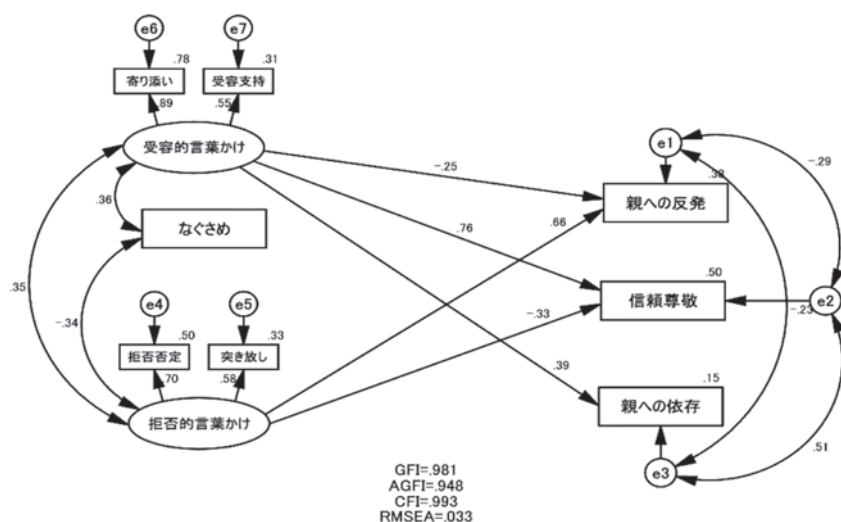


図1 母親の言葉かけ—娘の態度のパスモデル

## II 自尊感情と他者受容の形成

親からの言葉かけが自尊感情の形成にどのよ

うな影響を与えているのだろうか。自尊感情は自分を大切に思える感情であり、自分が重要だと考える側面での有能性であると小嶋は指摘している（小嶋・森下，2009）。

森下・岸畑（2011）は、女子大学生を対象として、両親間の絆と不和が子どもの自尊感情と無力感にどのような影響を与えるかについて研究した。パス解析の結果、両親間の絆は、母親と父親の受容を高め、その受容的態度を介して子どもの自尊感情を高めていた。他方、両親間の不和は、母親の統制を高め、父親の統制と拒否を高めていた。そして、母親の統制と父親の拒否的態度が子どもの無力感を高めていた。

また、森下・上田（2016）は、女子大学生を対象として、祖父母と孫娘との関係と孫娘の自尊感情や自己受容との関連を扱った。その結果、①現在同居の祖母について、祖母を信頼し自分の生き方のモデルとしての「人生の指針」としているほど、孫の『自尊感情』や『自己受容』が高かった。過去同居やこれまで同居したことがない祖母については、そのような影響は弱かった。②現在同居の祖父について、「心の支え」は『自尊感情』を、「理解共感」は『自己受容』を高めていた。しかし、別居の祖父についてはそのような関連はみられなかった。このように女子大学生にとって、特に同居の場合、「人生の指針」としての祖母の影響の大きさと、祖父の「心の支え」「理解共感」の重要性が目された。

自尊感情は、親子の相互作用の中で生じる安定した愛着関係が基盤になっている。つまり、家族との愛着関係や信頼関係に支えられて、また身近な人や仲間の評価をもとに自尊感情は形成される（小嶋・森下，2009）。

### 1. 食事場面での言葉かけの影響

母親の言葉かけは、子どもの自尊感情や他者受容にどのような影響を与えるのだろうか。子どもに対する言葉かけは、食事場面の会話のなかで多くなされると考え、食事場面における食卓の雰囲気や豊かさ、母親の言葉かけの特徴に焦点を当てた（森下・藤田，2012b）。

小学校5，6年生を対象として、①食事場面における言葉かけ、②自尊感情と他者受容について質問紙調査をおこなった。146名（男児53，女児93）のデータを分析対象とした。

#### (1) 食事場面での言葉かけ

食事場面における言葉かけについて、二つの場面を想定し、予備調査に基づいて新しい質問紙を作成した。項目を因子分析した結果、普段の食事場面での言葉かけについては、「共感」「統制」「感謝」「行儀」の4因子が得られた。子どもの嫌いなものが出された食事場面については、「拒否」「誘導」「妥協」の3因子が得られた。

#### (2) 言葉かけと食卓の雰囲気

食卓での母親の言葉かけの特徴や食卓の雰囲気が、自尊感情や他者受容に対してどのような影響を与えるかについて、総合的に検討するために仮説に沿って共分散構造分析をおこなった。その結果、最終的に比較的適合度の高いパスモデルが得られた（図2）。図に示すようにそれぞれ潜在変数を導入した。パス係数はすべて1%レベルで有意である。図が示すように、母親の言葉かけが食卓の雰囲気に影響を与えていた。子どもが食事場面を楽しみと感じる背景には、母親の食べ物に対する「感謝」の言葉かけや、子どもへの「共感」の言葉かけが豊かであることや、子どもに対する「拒否」の言葉かけが少ないという特徴のあることがわかった。

#### (3) 言葉かけと自尊感情や他者受容

楽しい『食卓の雰囲気』が子どもの『自尊感情』や『他者受容』を高めるということが明らかとなった。食事場面において自尊感情や他者受容を高めた言葉かけには、「食べものに感謝して食べようね」という「感謝」の言葉かけや、嫌いな物を子どもが食べたときなど「がんばって食べたね、えらいね」というような「共感」の言葉かけがあった。その根底には、母親の愛情豊かな暖かい態度があるだろう。食べ物をただの物としてとらえるのではなく、命をいただいているという感謝の言葉には、食べ物を尊ぶだけでなく、周りの人や物を大切にし、思いやる母親の態度が反映されている。このような背景をもつ楽しい食事という雰囲気が、子どもの豊かな心のよりどころとなっている。これが子どもの自尊感情や他者受容の形成の基盤になっているだろう。

また、食事場面において表現される人の気持ちに寄り添う「共感」的な母親の態度が、子どもの行動のモデルとなり、友達をはじめとする他者の気持ちに寄り添う『他者受容』の態度が形成されるのではないかと推測される。

別の視点からながめると、子どもが食事場面を楽しめない・窮屈だと感じる背景に、母親からの「感謝」の言葉かけや「共感」の言葉かけが少ないことや、「拒否」の言葉かけが多いということがある。拒否的な言葉かけ、つまり、自己が尊重されない、心の通わない食卓の雰囲気なかでは、他者に対する共感や肯定的な態

度が形成されにくいといえよう。

他者受容は自分が他者から受容されてはじめて可能となるものである。ここにも他者を受容する母親へのモデリングが働いている可能性がある。また、母親の食卓での拒否的な言葉かけは、食卓の雰囲気を楽しくないものになっているだけにとどまらず、家庭生活全般のなかで母親の拒否的な態度が、楽しくない家庭の雰囲気を形成しているかもしれない。このことが、自尊感情や他者受容の形成を阻害しているのではないかと推測される。

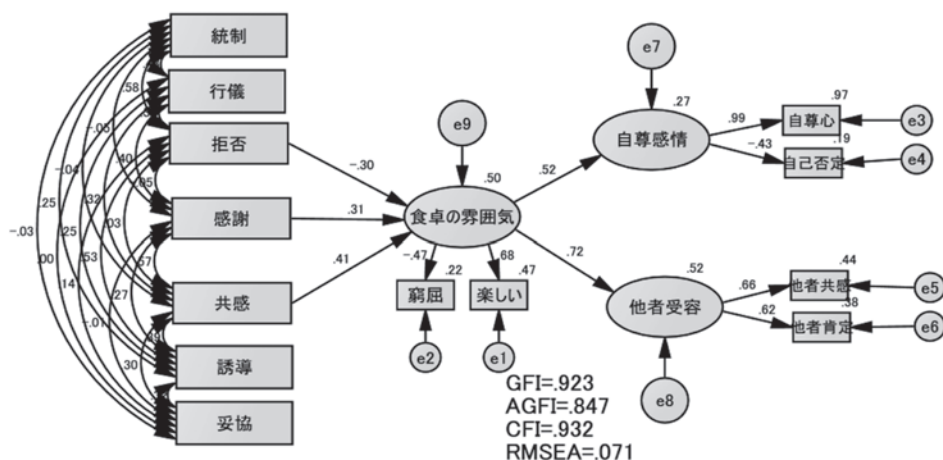


図2 母親の言葉かけ(食卓の雰囲気)→子どもの自尊感情・他者受容のパモデル

先の偏食に関する研究(森下・藤田, 2012a)では、母親の言葉かけが『食卓の雰囲気』を媒介として偏食に影響するというよりは、母親の言葉かけが直接影響をおよぼしていた。それに対して本研究では、母親の言葉かけは、直接的な影響を与えるというよりは、『食卓の雰囲気』を媒介として自尊感情や他者受容に対してより大きな影響をおよぼしていた。『食卓の雰囲気』は、食事行動だけでなく、自尊感情や他者受容といった子どものパーソナリティ形成にも強く影響する機能を内包していることがわかった。

本研究において、子どもの気持ちや自我に訴えるという「誘導」的な言葉かけは、偏食に対しても、自尊感情や他者受容に対しても効果をもた

なかった。ここで作成された「誘導」尺度について吟味し、今後、より妥当性の高い「誘導的態度」尺度を作成する課題が残された。

## 2. 具体的な場面での言葉かけと子どもの特性に関する言葉かけの影響

児童期の日常場面における母親の言葉かけが、その後の子どもの自尊感情や他者信頼の形成にどのような影響を与えるだろうか。日ごろの母親からの言葉かけのなかで、評価を伴った言葉かけが子どもの自尊感情に影響を与える。それには、具体的な場面での子どもの行為そのものに対する言葉かけと、一般的な子どもの特性に関する言葉かけの二つが想定される。

### (1) 言葉かけの様式と内容

ギノット(1973)は、子どもをほめるなら、子どもの努力や、それによってなしとげられたことをほめること、子どもの性格や人格を問題にしてはならないと述べている。性格や人格についてほめられると、その評価や期待に応え続けることへの不安が生じ、子どもはむしろそれとは反対の行為をとるようになると説明する。

他方で、具体的な場面での言葉かけの背景に親の態度があり、その態度のほうが具体的な言葉かけよりも自己制御に影響しているという知見がもたらされた(森下・前田, 2015)。このような文脈からは、子どもの性格などの特性に関する言及のなかに子どもに対する親の基本的な態度や評価が含まれている。したがって、子どもの特性に関する言葉かけのほうが、子どもへの影響は大きいとも予想される。そこで、どちらの言葉かけが、子どもの自尊感情に大きな影響を与えるかについて検討した(森下・後藤, 2016)。

女子大学生に質問紙調査をおこない、記入漏れのなかった280名を分析の対象とした。

### (2) 言葉かけの因子

児童期における子どもの特性に関する言葉かけについては、次のような2因子が得られた。第1因子は、「信頼しているよ」「おもいやりがあるね」「やさしい」などの項目に負荷が高く、肯定的で受容的な内容から「ポジティブ」な言葉かけ因子と命名した。第2因子は「ばかだ」「しつこい」「わがままで」という否定的で拒否的内容で「ネガティブ」な言葉かけ因子と命名した。各因子に対応する尺度について、 $\alpha$ 係数を算出して信頼性を確認した。

具体的な場面での母親の言葉かけについては、3因子が得られた。第1因子は、「頑張ったね」「すごいね」という項目に負荷が高く、子どもを肯定的に受け入れる「受容的」因子と命名した。第2因子は、「あそんでばかりいるからよ」「手間が増えたわ」「あほやな」という否定的な内容の「否定的」因子とした。第3因子は、「手伝ってくれて助かるわ」や「手伝ってくれてありがとう」という感謝を表す「感謝」因子とし

た。各尺度について $\alpha$ 係数を算出したところ、高い値が得られた。

### (3) 二つの言葉かけの関連

パス解析の結果、得られたパスモデルを図3に示す。いろいろなパスモデルを構成し分析するなかで、このパスモデルのパス係数や適合性をもっとも高かった。パス解析の結果、「ポジティブ」な言葉かけは「受容的」言葉かけと「感謝」の言葉かけを高め、「ネガティブ」な言葉かけは「拒否的」言葉かけを高め、「感謝」の言葉かけを低下させていた。したがって、子どもの性格特徴に関する認識(ここではポジティブ、ネガティブな言葉かけ)が、具体的な場面における言葉かけに影響する可能性が高い。このような結果は、一般的な養育態度が具体的な言葉かけを規定しているという先の研究結果(森下・前田, 2015)と一致するものであった。

### (4) 言葉かけと自尊感情・他者信頼

児童期の母親の「ポジティブ」な言葉かけは、子どもの「自尊感情」を高め、「ネガティブ」な言葉かけは「自尊感情」を低下させていた。しかし、具体的な場面における「受容的」「否定的」「感謝」の言葉かけはいずれも「自尊感情」に影響していなかった。

また、児童期の母親の「ポジティブ」な言葉かけは、子どもの「他者信頼」を高め、「ネガティブ」な言葉かけは「他者信頼」を低下させていた。そして、「ポジティブ」な言葉かけは「感謝」の言葉かけを高めそれを介して「他者信頼」を高め、「ネガティブ」な言葉かけは「感謝」の言葉かけを低下させそれを介して「他者信頼」を低下させていた。パス係数を比較すると、「他者信頼」には「ネガティブ」な言葉かけのマイナスの影響が比較的強く、「自尊感情」には「ポジティブ」な言葉かけの影響が強かった。

要約すると、子どもの特性に関する母親からのポジティブあるいはネガティブな言葉かけは自尊感情や他者信頼に影響しており、具体的な場面における受容的な言葉かけや否定的な言葉かけは影響していなかった。つまり、子どもの特性についての言葉かけが、子どもに強い影響を与えるということが示唆される。

(5) 分散分析にみる言葉かけの影響

パス解析では、独立変数（説明変数）間に交互作用がある場合、有意なパスがみられないことがあるので、さらに分散分析をおこなった。その結果、パス解析ではみられなかった新しい発見があった。母親から「ポジティブ」な言葉かけと「受容的」言葉かけの多い群は、「自尊感情」得点が高かった。このような結果は、「受容的」言葉かけ単独では効果がなくても、「ポジティブ」な言葉かけと合わさると、より「自尊感情」を高めるということを示している。

また、否定的な言葉かけも感謝の言葉かけも

多い群は「他者信頼」得点が高いという結果であった。しかし、「否定的」言葉かけが多く「感謝」の言葉かけが少ない群は「他者信頼」が非常に低いという結果であった。したがって、母親の肯定的な言葉かけや感謝の言葉かけのなかに、否定的な言葉かけがある場合に、他者により強い信頼をよせる可能性がある。

以上の結果を総合すると、子どもの特性に関する言葉かけの影響という大きな流れのなかで、具体的な場面でのことばかけも子どもの自尊感情や他者信頼に微妙な影響をもたらしているといえるだろう。

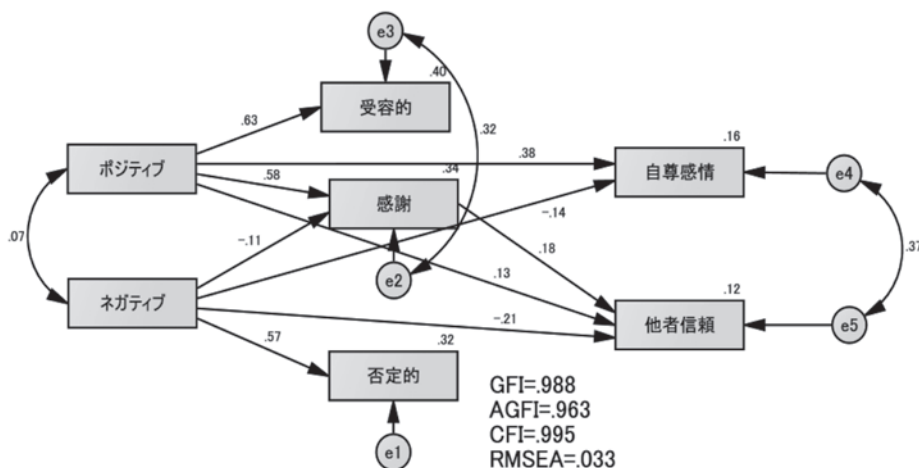


図3 母親の言葉かけ—自尊感情・他者信頼のパスモデル

Ⅲ 自己制御の形成

子どもの自己制御の発達にどのような要因が影響するのだろうか。父母の養育態度や園の保育特徴と幼児の自己制御の発達を扱った一連の研究で、主として次のようなことが明らかとなった（森下，2003）。① 家庭と園での自己抑制や自己主張の特徴は必ずしも一致しなかった。家庭でも園でも自己抑制の高い子どもの父母は共に受容的であったのに対して、自己抑制の低い子どもの父母は共に拒否的であった。また家庭でも園でも自己主張の強い男子の母親は矛盾が少なく、その反対に自己主張の弱い男

子の母親は矛盾が多かった。② 父母共に受容的な場合、女子は自己抑制が高かった。父母共に拒否的な場合、男女ともに攻撃性が高かった。また、母親の統制が強く父親の統制が弱い場合、男子は強い自己主張と強い攻撃性を示し、女子も強い攻撃性を示していた。③ 安全・過程重視、協調性・思いやりを重視する園の場合、子どもは自己抑制や養護性が高く、攻撃性が低かった。他方、冒険やたくましさを重視した保育特徴や、生活体験や子ども主導を非常に重視する園の子どもは、比較的自己抑制が低く攻撃性を表出する傾向が強かった。

### 1. 言葉かけと自己制御

母親からの自己制御を奨励し促進するような言葉かけと親子の信頼関係は、子どもの自己制御の形成にどのような影響を与えるだろうか。この点を明らかにするために、女子大学生346名を対象として質問紙調査を行った（森下・藤村, 2013）。小学生のころ、母親（または母親に代わる養育者）からの言葉かけの内容と頻度、母親に対する信頼、現時点での自己抑制力、自己主張力、頑張る力について評定を求めた。

因子分析によって、自己抑制を促す「自己抑制の言葉かけ」と自己主張を促す「自己主張の言葉かけ」の2因子が得られ、尺度を作成し、尺度の信頼性を確認した。

#### (1) 言葉かけと信頼関係と自己制御

養育者からの言葉かけ、「信頼」関係、「自己抑制力」「自己主張力」「頑張る力」が相互にどのような関連があるかを総合的に明らかにするために、パス解析をおこなった。その結果、図4に示すように適合性の高いパスモデルが得られた。児童期に「自己抑制の言葉かけ」が多いほど、「自己主張力」を高めていた。また「自

己主張の言葉かけ」は直接「自己抑制」を高めるとともに、母親との「信頼」を高め、それを介して「自己抑制力」と「頑張る力」を高めていた。特に母親への信頼が子どもの「自己抑制」と「頑張る力」を高める可能性が示唆された。「自己抑制力」と「自己主張力」はともに「頑張る力」を高めていた。

#### (2) 信頼と言葉かけの交互作用

次に養育者からの言葉かけと信頼に関して、得点の高い群と低い群を作り、自己制御力をそれぞれ従属変数として2要因の分散分析をおこない、交互作用に注目した。①養育者への「信頼」が高くかつ「自己主張」を促進する言葉かけが多い群は、「自己抑制力」が高かった。②養育者への「信頼」が高くかつ「自己抑制」や「自己主張」を促進する言葉かけが多い群は、他の群より有意に「頑張る力」が高かった。したがって、小学生の頃、養育者に対する「信頼」が高い場合、養育者から自己抑制や自己主張を促す言葉かけが多いと、「頑張る力」が形成されることが示唆される。

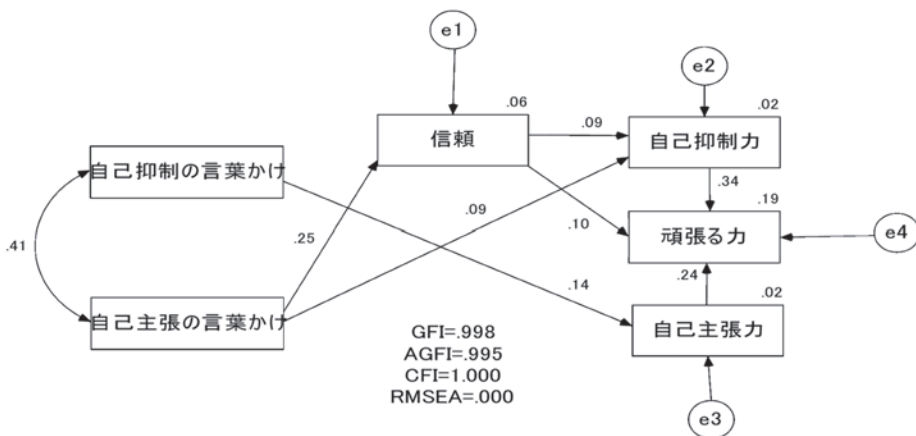


図4 言葉かけ—(信頼関係)—自己制御のパスモデル

### 2. 養育態度・しつけ方略と自己制御

誘導的なしつけ方略 (inductive discipline strategies; Hoffman, 1975) は、子どもの自己制御の形成に対してどのような影響を与えるのだろうか。森下・藤村 (2013) の研究では、

養育者との信頼関係のもとで幼い頃から自己制御を奨励し促進するような言葉かけが多いほど、子どもは最後まで「頑張る力」がより高まるということが示唆された。その研究では自己制御を奨励し促進するような言葉かけに焦点を当て



ていた。しかし、そのような直接的な表現ではなく子どもの気持ちや自我に訴えかける言葉かけ、特に説明を与えながら子どもに考えさせる説明的あるいは誘導的な言葉かけ（誘導しつけ方略）の効果を明らかにしたい。

このような誘導しつけ方略は、日本の文化的特徴とされており、子どもの気持ちや自我に訴えるというしつけスタイルの反映である（小嶋, 1986；東, 1994）。誘導しつけ方略の根底には子どもを信頼し受容する態度が想定される。このように、子どもの自己抑制や自己主張が発達するためには、親からの誘導的な態度や言葉かけと共に親から受容され肯定されることが重要であろう。幼児を対象にした森下（2000）の研究では、母親の自己抑制や自己主張への誘導方略は、幼稚園の年中女子に対して自己抑制と自己主張の両方を高める可能性を示唆していた。

児童期における母親の受容的な養育態度は、自己抑制や自己主張を誘導する言葉かけを促進し、そのような態度と言葉かけが共に子どもの自己抑制や自己主張を促進するのではないかとこの仮説を立てた。同時に友達重視の態度や甘やかしの態度の影響についても扱った。

#### (1) 誘導的な言葉かけ尺度の作成

すでに述べたように、誘導的なしつけや言葉かけに関する研究そのものが少ない。そのようななかで、偏食に対する誘導的な言葉かけ尺度の作成を試みたが、その意図を反映するような尺度の作成がなかなか難しいということがわかった（森下・藤田, 2012a）。そこで、自己制御に関して誘導方略の新しい尺度を作成することから研究を始める必要があった。しつけ方略について、誘導的な言葉かけを中心に新しい質問紙を作成し、尺度を作成した（森下・前田, 2015）。

女子大学生を対象に、児童期の母親の誘導的な言葉かけと養育態度に関する評定、現時点での自己制御の特徴について評定を求めた。記入漏れのない314名のデータを分析の対象とした。

#### (2) 誘導的な言葉かけと自己制御の因子

因子分析の結果、誘導的な言葉かけについては、「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励

まし」の3つの因子が得られた。自己制御に関しては「自己主張」「根気我慢」「情動抑制」の3つの因子が得られた。「自己主張」因子は柏木（1986）の自己主張的側面に、「根気我慢」「情動抑制」は柏木の自己抑制的側面に対応していた。すでに別の研究（森下・藤村, 2013）で示したように、「根気我慢」因子は抑制的な機能だけではなく自己主張的な側面をも含み、自己制御機能の重要な特性である。

#### (3) 養育態度と言葉かけ

パス解析の結果、図5に示すように、母親の「受容」的態度は誘導的なしつけ方略「自己抑制の誘導」「自己表現の誘導」「励まし」3因子をそれぞれ高めていた。「統制」的態度も「自己抑制の誘導」と「自己表現の誘導」を高めていた。「友達重視」は「自己抑制の誘導」と「励まし」を高めていた。したがって、母親の言葉かけの背景には、養育態度があるということが分かった。先の研究（森下・藤田, 2012b）において、食卓における母親の言葉かけの背景に母親の養育態度があるのではないかと推測したが、そのことがここに確認されたといえるだろう。

#### (4) 養育態度・言葉かけと根気我慢・情動抑制

パス解析の結果、児童期の母親の「受容」的態度は子どもの「根気我慢」と「情動抑制」を直接高めると共に、「励まし」の言葉かけを介して子どもの「根気我慢」と「情動抑制」を高めていた。したがって、児童期の母親の受容的な養育態度は一般に根気我慢高めると共に、母親が受容的な場合に、母親からの「励まし」の言葉かけが特に「根気我慢」を高めるとことが明らかとなった。これらの結果は、森下・藤村（2013）の結果と一致していた。しかし、言葉かけのなかで「励まし」以外は、それ自身「根気我慢」や「情動抑制」に対しては影響しないという結果であった。

#### (5) 養育態度・言葉かけと自己主張

しかし、分散分析をおこなったところ交互作用がみられた。母親から「自己表現の誘導」の言葉かけが多い場合、母親の「受容」あるいは「励まし」の言葉かけが多ければ子どもの自己

主張が高くなるということ、母親の「受容」や「励まし」の言葉かけが少なければ子どもの自己主張が著しく低くなるということが明らかとなった。つまり、自己主張に対する自己表現の言葉かけの効果は、母親の受容的態度や励ましの言葉かけがあつてこそみられ、それがない場合には逆効果をもたらすことが示唆された。

この結果は、言葉かけがどのような態度から発せられるかが重要だということを示している。自己主張を誘導する言葉かけも、受容的でない母親から発せられると、子どもはむしろ批判や非難として受け止め、より自己主張を低下させる可能性がある。受容的態度から励ましの言葉かけには強いパスが行っており、励ましの言葉

かけの背景に受容的態度があると示唆している。

(6) 統制, 甘やかし, 友達重視の影響

母親の「統制」的態度が自己抑制や自己主張に対して直接的にも間接的にも影響していないということが明らかになった。

母親の「甘やかし」は、子どもの「情動抑制」を直接低下させていた。欲求がいつでもかなえられるという状況は、情動を抑制する力を育てないということができるだろう。

母親の「友達重視」は子どもの「励まし」の言葉かけを介して「根気我慢」や「情動抑制」を高めていた。「友達重視」は「受容」的態度と正の相関があり、両者は同じような機能を持っている。

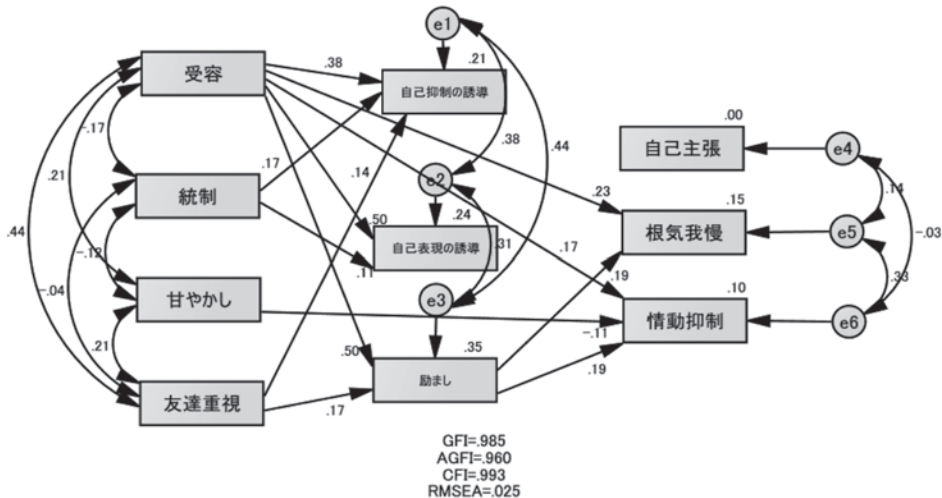


図5 母親の養育態度—(誘導方略)—自己制御のパスモデル

IV 情動表現スタイルの形成

情動表現スタイル (emotional expressivity) は、個人の感情の表現の特徴である。それは肯定的で親和的な情動表現 (喜ぶ, 感謝する, ほめる, 励ます, 感激するなど) が多いか, 拒否的で否定的な情動表現 (怒る, 攻撃する, 批判する, 軽蔑する, 不満を言うなど) が多いかに分類することができる (田中, 2009)。このような情動表現スタイルは、ある程度個人に一貫

した行動スタイルであるので、パーソナリティの一側面といえる。この特性は個人の特徴を示すだけでなく、その特徴は、周りの人、特に母親が子どもに与える影響は大きい。

1. 母親と子どもの情動表現スタイル

母親の情動表現スタイルは子どもにどのような影響を与えるだろうか。3歳~6歳の子どもの母親を対象とした田中 (2009) の研究では、自己中心的で不快感を与える情動表現スタイル得点の高い母親の子どもは、自己コントロール

得点が低く、否定的情動得点が高かった。それに対して、親和的・共感的な情動表現スタイル得点の高い母親の子どもは、自己コントロール得点が高かった。

(1) 情動表現スタイルのモデリング

モデリングの視点から、母親の情動表現の特徴は、子どもの情動表現のモデルになりやすいと予想される。従来の研究では、子どもとモデルとの関係が親和的な場合、向社会的行動のようなポジティブな行動のモデリングが子どもに

生じやすく、子どもとモデルの関係が非親和的な場合、攻撃行動のようなネガティブな行動のモデリングが子どもに生じる可能性が高いことが示唆された（森下，1996）。

したがって、母親の親和的な情動表現スタイルは、娘と母との信頼関係を高め、その信頼関係が娘の親和的な情動表現を高め、さらに娘の自尊感情および自立心を高めるだろう。その反対に、母親の否定的な情動表現スタイルは、上記と反対の影響を与えると予想される。

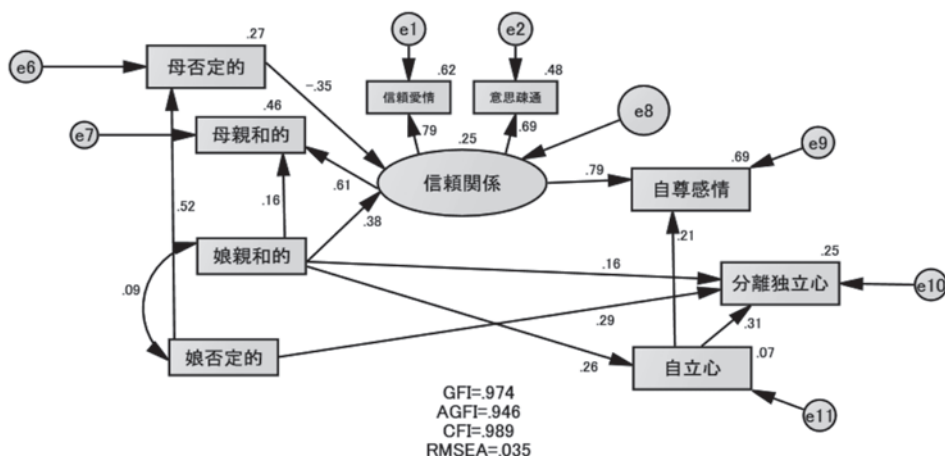


図6 母と娘の情動表現スタイル—(信頼関係)—自尊感情のパスモデル

(2) 母親と子どもの情動表現スタイル

女子大学生を223名を対象として検討した（森下・福井，2014）。種々のモデルを作成して共分散構造分析をおこなった結果、もっとも適合性の高いモデルは次のことを示していた（図6）。①娘の「親和的情動表現」が母親の「親和的情動表現」を高め、娘の「否定的情動表現」が母親の「否定的情動表現」を高めていた。つまり、予想とは反対に娘の情動表出の特徴が母親の情動表出の特徴に影響を与えていたのである。②娘の「親和的情動表現」が、娘と母親の『信頼関係』を高め、母親の「否定的情動表現」が『信頼関係』を低下させていた。③しかし、母親の「親和的情動表現」が『信頼関係』に影響するのではなくて、むしろ『信頼関係』が母親の「親和的情動表現」を高めていた。④娘と

母親の『信頼関係』は娘の「自尊感情」を高めていた。

①から③までの結果は、予想に反するものであった。そこには、子どもの情動表現の特徴が母親に影響しているかもしれないが、それ以外の要因も考えられる。それは、母親の情動の特徴や母親との信頼関係について娘が評定をおこなったということである。そこに評定者の認知的枠組みが関連し、娘自身の情動表現スタイルの認知が、母親の情動表現スタイルの認知に影響を与えているのではないかと考えられる。つまり母親の情動表現スタイルの特徴を自分の特徴に類似したものとして認知している、ということも反映している可能性がある。したがって、この分析におけるパスは因果関係を示す指標というよりは、子どもの認知のプロセス内での関連を反映して

いると解釈することができるかもしれない。この点を明確にするためには、母親自身に情動表現スタイルを評定してもらう必要があるだろう。

## 2. 母親の言葉かけと子どもの情動表現スタイル

児童期の母親の普段の言葉かけが、子どもの感情状態や情動表現スタイルの形成にどのような影響を与えるだろうか。母親からの言葉かけは、子どもの感情経験の内容に影響すると共に、子どもと母親との信頼関係にも影響する（田中, 2009; 森下・福井, 2014）。それらの感情経験と信頼関係は情動表現スタイルの形成に影響すると予想される。

そこで、次のような基本的な枠組みを構成した。① 親の養育態度が子どもに対する親の言葉かけに影響する。② 言葉かけは子どもの感情状態に影響する。③ 子どもの感情状態は子どもの情動表現スタイルの基盤となる。また、④ 親の言葉かけは親子の信頼関係に影響し、それを介して子どもの感情状態や情動表現スタイルの形成に影響する。以上の枠組みに沿って、研究をすすめた（森下・稲葉, 2016）。

女子大学生276名を対象とし、児童期の母親の養育態度と言葉かけ、現在の感情状態や情動表現スタイル、および母親との信頼関係の特徴について質問紙調査をおこなった。

### (1) 母親の養育態度と言葉かけ

パス解析の結果、図7に示すように、児童期における母親の「受容」的態度は児童期の母親の「信頼の言葉かけ」や「共感の言葉かけ」をそれぞれ高めていた。また、母親の「統制」的態度は「否定的な言葉かけ」を高めていた。このことから、母親の言葉かけの背景には母親の養育態度があるということがわかった。

### (2) 養育態度や言葉かけと感情状態

パス解析の結果、養育態度は直接感情状態に影響してはいなかった。しかし、分散分析の結果、母親の態度の「受容」が少なく「統制」が多い群、つまり拒否の統制群では「否定的感情」得点が著しく高かった。

児童期における母親の「共感の言葉かけ」は

子どもの「肯定的感情」を高め、「否定的な言葉かけ」は子どもの「否定的感情」を高めていた。また、「信頼の言葉かけ」は、「共感の言葉かけ」と共に母親への「信頼関係」を高め、それを介して「肯定的感情」を高めていた。それに対して、「否定的な言葉かけ」は、母親への「信頼関係」を介さずに、直接「否定的感情」を高めていることが特徴であった。このように、否定的な言葉かけは肯定的な言葉かけよりも子どもの感情により直接的な強い影響を与えるということが示唆される。

### (3) 養育態度や言葉かけと情動表現スタイル

母親の「統制」的態度は直接子どもの「否定的情動表現」スタイルを高めていた。また、「統制」的態度は「否定的な言葉かけ」を介して子どもの「否定的感情」を高め、さらに「否定的情動表現」スタイルと「うろたえ情動表現」スタイルを高めていた。これは田中（2009）の結果と一致するものであった。

情動表現スタイルに強い影響を与えているのは、おもに感情状態の特徴であって、「肯定的感情」は「親和的情動表現」スタイルに、「否定的感情」は「否定的情動表現」スタイルに強い影響を与えていた。したがって、情動表現の基盤に感情状態があるということが示唆される。

分散分析の結果、児童期の母親の態度が「受容的」でなく、かつ「共感的な言葉かけ」も少ない場合は「否定的情動表現」得点が非常に高かった。しかし、たとえ母親の態度が「受容的」でなくても「共感的な言葉かけ」が多い場合は「否定的情動表現」得点が低いということを示していた。否定的情動表現スタイルの形成には、受容的な養育態度の少なさよりも共感的な言葉かけの少なさが関与している可能性がある。

他方、児童期において、「母の統制」も「否定的な言葉かけ」もともに少ない群は、「否定的情動表現」得点が著しく少ないという結果であった。この点はパス解析結果の帰結と一致するもので、親から自立性を尊重され、かつ否定的な言葉かけが少ないなかでは、子どもの否定的情動スタイルは形成されないといえるだろう。

(4) 母子の信頼関係と情動表現スタイル

児童期の母親の「信頼の言葉かけ」と「共感の言葉かけ」は、ともにその後の母子間の「信頼関係」を高めていることが明らかになった。児童期における「信頼の言葉かけ」や「共感の言葉かけ」のもとで母子間の信頼関係が形成されることを示唆している（森下・松山, 2014）。

パス解析の結果、その母子間の「信頼関係」は、子どもの「肯定的感情」を高め、それが「親和的情動表現」スタイルを高めることを示していた。つまり、母親との信頼関係は、子どもの心

の拠り所となり、子どもの心を安定させ、子どもの「肯定的感情」を高め、それを介して「親和的情動表現」スタイルを高めるといえる。

以上の結果から、次のようにまとめることができる。児童期の母親からの肯定的な言葉かけが、直接、肯定的な情動表現スタイルを高めるとともに、肯定的な言葉かけが信頼関係を介して肯定的感情を高め、それが情動表現スタイルを高める。それに対して、否定的な言葉かけは、信頼関係を介さずに、否定的感情を高め、それが否定的情動表現スタイルを高める。

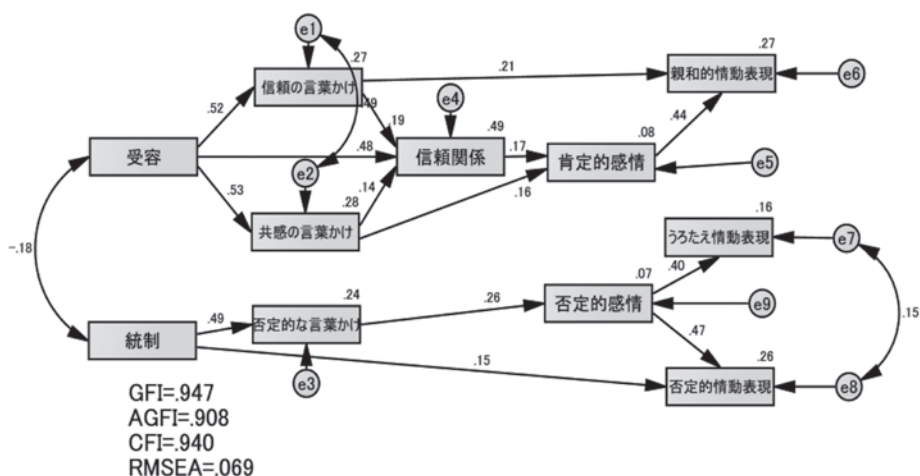


図7 養育態度・言葉かけ—(信頼関係) (感情状態)—情動表現スタイルのパスモデル

V 総合的考察

本研究は、主として女子大学生について、児童期の母親の言葉かけが、母親に対する子どもの態度、自尊感情や他者受容、自己制御、情動表現スタイルの形成にどのような影響を与えるかに焦点を当てた。パス解析の結果、全体として、受容的・共感的・肯定的・励ましの言葉かけが、母親への信頼、自尊感情や他者信頼、根気我慢、親和的情動表現スタイルを高めるといことが示唆された。その反対に、拒否的・否定的な言葉かけはそれらを低下させていた。

そして言葉かけの背景に、母親の受容的—拒否的、統制的—自立性の尊重という養育態度が

あるということがわかった。ときには母親の養育態度が言葉かけを介さずに、子どもの自己制御や情動表現スタイルの特徴に直接影響を与えていた。例えば、受容的な態度が根気我慢を高め、統制的態度が否定的情動表現スタイルを高めていた。さらに母親の養育態度や言葉かけから形成された母親との信頼関係が、子どもの自己抑制や頑張る力、親和的情動表現を高めるといことが示唆された。つまり、『養育態度—言葉かけ—信頼関係—子どものパーソナリティ』という基本的な図式を描くことができる。それがパスモデルとして示されたといえる。

本研究の限界は、質問紙法による相関的なデータを共分散構造分析によって因果関係を探ったという点にある。得られたパスモデルは

データを最もよく説明できるモデルではあるが、因果関係を証明したことにはならない。また、研究対象が主として女子大学生であったという点にある。男子大学生を対象とした研究も必要である。母親の言葉かけや養育態度に焦点を当てたが、父親に関する研究も必要である。

さらに、本研究において、児童期の母親の言葉かけや養育態度の測定は、学生自身の回想法によるものが多かった。いうまでもなく、その時点での言葉かけや養育態度の特徴を、子ども自身の評定だけでなく、親自身の評定や観察法を用いた測定によって明らかにし、その後の子どもの発達を追跡研究することが理想である。たとえ追跡的な研究が無理だとしても、幼児期、児童期、青年期の子どもたちに両親の言葉かけや養育態度がどのような影響を子どもに与えているかを明らかにする研究課題が残されている。

学生たちの卒論の自主的なテーマ設定が、著者の研究テーマと一致したのは、誠に幸いなことであった。そして、その研究成果を個々の論文に共同でまとめることができた。本論文で紹介されている論文のほかに、多くの研究をゼミ生や大学院生たちと協力しておこなうことができた。調査対象として多くの人たちの協力を得たこととともに心より感謝したい。

#### 引用文献

- 足立浩平 (2006). 多変量データ解析法—心理・教育・社会系のための入門— ナカニシヤ出版
- 東洋 (1994). 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- ギノット・ハイム (森 一祐 翻訳) (1973). 親と子の心理学—躰を考えなおす12章 小学館
- 小嶋秀夫 (1986). 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(1) 名古屋大学教育学部紀要—教育学科, **33**, 1-24.
- 小嶋秀夫・森下正康 (2009). 児童心理学への招待 [改訂版] 学童期の発達と生活 サイエンス社
- 森下正康 (1996). 子どもの社会的行動の形成に関する研究 風間書房
- 森下正康 (2000). 幼児期の自己制御機能の発達(2)—親子関係と幼稚園での子どもの特徴— 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, **10**, 117-128.
- 森下正康 (2003). 幼児の自己制御機能の発達 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, **13**, 47-56.
- 森下正康・福井えがお (2014). 母親の情動表現スタイルが女子大学生の情動表現スタイルと自尊感情や自立心に与える影響—母子の信頼関係を媒介として— 発達教育学研究, **8**, 21-30.
- 森下正康・藤村あずさ (2013). 小学生の頃の養育者からの言葉かけが女子大学生の自己制御機能の発達に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **9**, 125-134.
- 森下正康・藤田のゆり (2012a). 食卓の雰囲気と母親の言葉かけの特徴が児童の偏食におよぼす影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **8**, 117-125.
- 森下正康・藤田のゆり (2012b). 母親の言葉かけの特徴と食卓の雰囲気が児童の自尊感情と他者受容におよぼす影響 発達教育学研究, **6**, 31-41.
- 森下正康・後藤早紀 (2016). 児童期の母親の言葉かけと女子大学生の自尊感情や他者信頼—具体的な場面での言葉かけと特性に関する言葉かけの影響— 京都女子大学発達教育学部紀要, **12**, 153-162.
- 森下正康・稲葉春果 (2016). 児童期の母親の言葉かけが女子大学生の感情状態や情動表現スタイルに与える影響—パス解析モデル— 発達教育学研究, **10**, 31-42.
- 森下正康・岸畑あゆみ (2011). 両親間の絆や不和が女子大学生の自尊感情と無力感におよぼす影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **7**, 77-86.
- 森下正康・前田百合香 (2015). 児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **11**, 99-108.
- 森下正康・松山紗也 (2014). 中学・高校時代の母親の言葉かけが女子大学生の母子関係に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **10**, 103-112.
- 森下正康・上田佳乃 (2016). 祖父母との関係が女子大学生の自尊感情と自己受容に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **12**, 143-152.
- 小塩真司 (2008). 初めての共分散構造分析: Amosによるパス解析 東京書籍
- 豊田秀樹 (2007). 共分散構造分析 [Amos編] 東京書籍
- 田中あかり (2009). 母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響 発達心理学研究, **20**, 362-372.